

国土審議会第7回北海道開発分科会議事録

日 時：平成19年4月18日（水）

場 所：全国町村会館 ホールB

国土交通省北海道局

国土審議会第7回北海道開発分科会議事次第

日時：平成19年4月18日（水）

12：00～14：00

場所：全国町村会館2階ホールB

1. 開会

2. 冬柴国土交通大臣挨拶

3. 議事

（1）分科会長の互選について

（2）新たな北海道総合開発計画の策定について（諮問）

（3）今後の調査審議の進め方について

（4）その他

4. 閉会

（配付資料）

資料1 国土審議会北海道開発分科会委員名簿

資料2 新たな北海道総合開発計画の策定について（諮問）

資料3 北海道開発分科会への付託について

資料4 新たな計画の策定に向けた今後の調査審議について（案）

資料5 計画策定に向けた国民意見の反映への取組について（案）

参考資料 国土審議会北海道開発分科会関係法令等

国土審議会第7回北海道開発分科会

平成19年4月18日（水）

【山下総務課長】 それでは、ただいまから第7回北海道開発分科会の審議を始めたいと思います。本日は皆様お忙しいところをお集まりいただきまして、ありがとうございました。私は本日の司会をさせていただきます国土交通省北海道局総務課長の山下でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本分科会につきましては、本分科会に属することとされた国土審議会委員3名及び国土審議会特別委員16名の計19名から構成されてございます。本日の分科会につきましては、19名のうち現在10名のご出席をいただいております。定足数と同等ですので、国土審議会令第5条第1項及び第3項の規定により成立いたしてございます。

なお、本日の会議の公開について申し述べさせていただきます。国土審議会運営規則第5条及び第1回北海道開発分科会決定によりまして、原則として会議及び議事録を公開することとし、議事録については発言者氏名入りで公開することとされてございます。あらかじめご了承くださいませようお願いいたします。

それでは、本日ご出席またはご出席予定の委員及び特別委員のご紹介をさせていただきます。以下、名簿順にご紹介させていただきます。

まず、衆議院の推薦による特別委員といたしまして丸谷佳織委員でございます。

【丸谷委員】 よろしく願いいたします。

【山下総務課長】 石崎岳委員、吉川貴盛委員は遅れてご到着というご連絡を受けてございます。

次に、参議院の推薦による特別委員といたしまして、ちょっと席を立てておられますが、中川義雄委員でございます。

次に、地方公共団体の長の特別委員といたしまして、上田文雄委員でございます。

【上田委員】 上田でございます。

【山下総務課長】 高橋はるみ委員の代理といたしまして、嵐田副知事でございます。

【高橋委員代理（嵐田副知事）】 嵐田でございます。

【山下総務課長】 次に、学識経験を有する委員及び特別委員といたしまして、家田仁委員でございます。

【家田委員】 家田でございます。よろしくお願いいたします。

【山下総務課長】 井須孝誠委員でございます。

【井須委員】 井須でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

【山下総務課長】 見城美枝子委員でございます。

【見城委員】 見城でございます。よろしくお願いいたします。

【山下総務課長】 丹保憲仁委員でございます。

【丹保委員】丹保でございます。

【山下総務課長】南山英雄委員でございます。

【南山委員】南山です。よろしくお願いします。

【山下総務課長】森地茂委員でございます。

【森地委員】よろしくお願いいたします。

【山下総務課長】なお、生源寺眞一委員ですが、遅れてご到着ということで連絡を受けてございます。

飯島夕雁委員、金田誠一委員、小川勝也委員、橋本聖子委員、岩沙弘道委員、北島哲夫委員につきましては、所用によりご欠席という連絡を受けてございます。

続きまして、国土交通省の出席者をご紹介します。

まず、北海道局長の品川でございます。

【品川北海道局長】品川でございます。よろしくお願いいたします。

【山下総務課長】審議官の奥平でございます。

【奥平審議官】奥平でございます。

【山下総務課長】同じく井置でございます。

【井置審議官】井置でございます。

【山下総務課長】北海道開発局長の本多でございます。

【本多北海道開発局長】本多でございます。よろしくお願いします。

【山下総務課長】以下、北海道局の各課長及び室長が出席させていただいてございます。

それでは、本日の資料の確認をさせていただきたいと思っております。議事次第の下のほうに配付資料ということでつけさせていただいてございます。

まず資料1ですが、国土審議会北海道開発分科会委員名簿でございます。

資料2が諮問文、資料3が付託について、資料4が新たな計画の策定に向けた今後の調査審議について（案）ということでありまして。

資料5で計画策定に向けた国民意見の反映への取組について（案）と書いてありますが、これについては後ほどお配りさせていただきたいと存じます。

参考資料として、国土審議会北海道開発分科会関係法令等でございます。

あと若干冊子をつけさせていただいてございます。

もし不足した資料がございましたらお知らせを願いたいと思っております。よろしゅうございましょうか。

それでは、早速ですけれども、本日の議事に入らせていただきます。

議題（1）は分科会長の互選でございます。本分科会に属しておられます国土審議会委員の生源寺委員、丹保委員、森地委員におかれましては2月末日で委員任期を満了されまして、改めて国土審議会委員に着任していただいております。

これに伴いまして、本日の分科会におきまして新たに分科会長を選出していただく必要

がございます。分科会長は国土審議会令第2条第4項の規定に基づきまして、分科会に属する委員のうちから委員及び特別委員が選挙するということになってございます。いかが取り計らいましょうか。

井須委員、お願いします。

【井須委員】大変僭越でございますが、お許しを得ましたので発言させていただきたいと思っております。

ただいまの件でございますけれども、今までもそうでしたが、大変幅広いご識見によりまして、従前から北海道開発分科会長としてご尽力をいただいております丹保委員に引き続きお願いをしてはいかがかと存じます。皆様にお諮りくださいますよう、よろしくごお願い申し上げます。以上であります。

【山下総務課長】ただいま井須委員からご提案がございましたが、よろしゅうございましょうか。何かご異議等がありましたら。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

【山下総務課長】ありがとうございます。それでは、皆様、ご異議がないようでございますので、丹保委員に分科会長をお引き受けいただくことにしたいと思います。よろしくごお願いいたします。

丹保分科会長におかれましては分科会長席にご移動の上、就任のご挨拶をいただきますとともに、分科会長代理をご指名いただきますようよろしくごお願いいたします。

【丹保分科会長】丹保でございます。ただいま井須委員からご推挙いただきまして、皆様のご賛同で従前のようにまたお手伝いをさせていただくこととなりますが、どうぞよろしくごお願いいたします。相変わらずでございますけれども、ご勘弁ください。

まず、分科会長代理がこの会にはありまして、前は泉特別委員にお願いをいたしておりました。もしお許しいただければ私から推薦させていただきたいと思っておりますが、よろしゅうございましょうか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

【丹保分科会長】それでは、南山委員に泉さんの後を継いで代理をお願いできれば幸いです。よろしゅうございましょうか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

【丹保分科会長】どうぞよろしくごお願いいたします。

【山下総務課長】間もなく冬柴大臣が到着いたしますので、ちょっとお待ちいただければと思います。

(冬柴国土交通大臣到着)

【山下総務課長】それでは、冬柴大臣が到着されましたので、早速でございますが、大臣からご挨拶をお願いしたいと思います。

【冬柴国土交通大臣】皆さん、こんにちは。本日は国土審議会の北海道開発分科会が開か

れるに当たりまして、このようにご多忙の中、ご出席を賜りました委員の皆様方に対して心から厚く御礼を申し上げます。

また、先生方におかれましては、平素、国土交通行政全般にわたりまして深いご理解と大所高所からのご意見を賜りまして、心から敬意を表し、また感謝を申し上げるところでございます。

言うまでもなく、北海道は本当にすばらしい魅力に富んだところでございます。何といっても食料自給率が200%、人口の倍というようなばく大な食料を生産し供給をしてくださっているということで、我々日本国民にとっては本当に欠くことのできない食料供給の基地という特徴を持っている地域でございます。

また、近年は雄大な大自然、北国らしい自然環境とか冷涼な気候が世界の人々を魅了いたしましたまして、多くの観光客が訪れることとなりました。特に台湾の人の訪れる数は爆発的でございます。また、倶知安の小さな町、ニセコのパウダースノーに魅かれて、倶知安の人口の10倍近いオーストラリアの人々が1年に訪れられるという驚くべき現象も生じているわけでございます。これは北海道の持つすばらしい魅力あふれる観光資源が生かされなければならないということを示唆しているように思います。

また、道民の長年の夢、悲願だと言われていました北の大地へ新幹線をというご要望に対しましても、一昨年、新青森から新函館までの着工を見まして、平成27年の完成を目指していま工事が進んでいることも北海道民の方々の一つの大きな夢であると思えます。

このようにすばらしい面があるわけですが、日本の経済は平成14年の初頭から大きく拡大を続けておりましてもう既に5年を経過しているわけですが、北海道におきましてはまだ厳しい状況が続いております。本年2月の有効求人倍率は全国で1.05まで示しているにもかかわらず、北海道では0.6ということで約半分という厳しい雇用状況でございます。しかしながら、我々は北海道の持つすばらしい資源を生かさなければなりません。第6回目の計画年次が切れようとしている今、これからの10年は日本にとっても大事な10年でございます。

そのような中にありまして、北海道の進むべき姿、ビジョンをここで示して、道民一致団結をして、また国もこれに対して全面的な支援をしながら完成させなければならないと私は思います。その意味で、先生方の英知を傾け、短い時間ではございますけれども、そのような観点から北海道の進むべき道を明確に示していただきたいと心から願うものでございます。

お忙しい中ではございますけれども、先生方の大所高所からのご意見、そしてまた忌憚のない議論を通じてすばらしい計画が策定されますように心から祈念を申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。本日は本当にご苦労さまでございます。ありがとうございました。(拍手)

【山下総務課長】 どうもありがとうございました。

それでは、議事に戻らせていただきます。議題（２）は新たな北海道総合開発計画の策定についての諮問でございます。冬柴大臣から諮問文を手交していただきます。大臣、森地国土審議会会長代理におかれましては奥にお進み願いたいと思います。丹保分科会長におかれましても、森地会長代理の横にご起立を願いたいと思います。

（諮問文手交）

【山下総務課長】 どうもありがとうございました。大臣は公務のためご退席ということでございます。

（冬柴国土交通大臣退席）

【山下総務課長】 それでは、石崎委員と吉川委員がご出席でございますのでご紹介をさせていただきます。

諮問文と分科会への付託文につきましては、写しをお手元の資料２、資料３ということで配付させていただいてございますのでご覧いただければと思います。

これ以降の会議の進行につきましては、丹保分科会長にお願いをしたいと存じます。どうぞよろしく願いいたします。

【丹保分科会長】 それでは、また会議に戻ります。今、諮問をいただきました。

議題（３）の今後の調査審議の進め方について、まず事務局から資料４で説明をしていただきましょう。お願いします。

【高松参事官】 北海道局参事官の高松でございます。座ったまま説明させていただきたいと思っております。資料４でございます。

先ほどの諮問、付託を受けまして、平成１９年度内に答申をいただくことを目途といたしまして、新たな計画の調査審議を進めていただくことになるわけでございます。本日はまず新たな計画の目標や具体的な推進方針について検討を進めるための計画部会の設置について議決いただき、また分科会や部会における検討の進め方や検討に際しての留意点、検討のスケジュールについてご意見をいただきたいと思います。存じます。

【山下総務課長】 １枚資料をめくっていただきまして、別紙１ということで北海道開発分科会計画部会設置要綱（案）をつけさせていただいております。簡単にご説明させていただきます。

２のところに書いていますが、この部会の任務といたしまして、一、新たな北海道総合開発計画の目標等に関する事項、二、新たな計画の具体的な推進方策に関する事項等につきまして調査、審議をして、その結果を分科会に報告するというところでございます。

構成ですが、３でございます。部会は国土審議会令第３条第２項の規定に基づき分科会長が指名する方をもって構成をするということでございます。

４ですが、部会は必要に応じて前項に規定する方以外の学識経験のある方の出席を求めることができるということで、幅広くいろいろな方のご意見を聞けるようにしたいということでございます。別紙１については以上でございます。

【高松参事官】 それでは、別紙2、別紙3についてのご説明をさせていただきたいと思
います。

別紙2の検討の進め方(案)でございます。「新たな計画は、大転換期の我が国が直面
する課題の解決に貢献し、地域の活力ある発展を図るための明確なビジョンとして策定さ
れることが必要である。このことを踏まえ、基本政策部会報告を基に、新たな計画に関す
る具体的な施策の検討を行う」ということでございます。

基本政策部会報告というのは、黄色の冊子をお配りしていると思いますが、平成18年
12月に国土審議会北海道開発分科会基本政策部会がまとめました部会報告をベースにこ
の中身の具体を詰めていくことにしてはどうかということでございます。

なお、検討に際してですが、前回の2月の分科会のときに各委員からいろいろ意見をい
ただいているところでございます。このまとめでいかかどうかということはございませ
けれども、そのときの論点を三つばかり要約させていただきました。

一つの論点といたしましては北海道開発の理念や目標に関する検討ということで、こう
いったものを深めてはどうかというご意見にまとめさせていただいております。

また、前回の分科会の中では、特に農業の厚みとか産業の重層化といった議論がござい
ました。それを含めて、産業全般に関する検討をもう少し深めてはどうかというご意見だ
ったというふうにまとめさせていただいております。

それから、国際化、とりわけ東アジア連携ということが国土形成計画の中にもあるよう
に、そういった部分について議論を深めていく。このポイント三つにまとめさせていただ
いております。別紙2は以上でございます。

次の4ページですけれども、それを少し計画のスケルトンに合わせる形で要約させてい
ただいております。一番左側のところに現行の6期計画の構成がございまして、1章から
6章までの構成になっております。1、2、3章はどちらかというと総論的な部分、4、
5、6章は各論的な部分ということで、箱を分けて書かせていただいております。

これに基本政策部会報告を重ね合わせてみますと、基本政策部会のI章、II章は総論の
ところに相当する中身ではないかと。それから、基本政策部会報告のIII章が各論に相当す
る部分でございます。この6期計画の構成を踏まえながら部会報告を重ね合わせてみて、
新たな計画の構造を検討するということでございます。

新たな計画の総論部分につきましては、部会報告の骨格を使いながら、先ほど申し上げ
ました論点の一つ目の基本的な理念、目標といったものを少し深めて議論を進めていきま
す。

各論のところでございますが、主要施策、施策の進め方については部会報告を骨格とし
ながら、主要施策についてはさらにその具体を深めて議論をしていきます。施策の進め方
に関しては推進方策を深めつつ、地域の将来像について部会報告の中では少し検討が必要
であるという表現になっておりますので、そここのところの書きぶりについてご検討をいた

できます。なお、全般にわたりまして、先ほどの産業、国際化について少し深掘りしながら内容を充実させていくということで、そのような議論の進め方でどうかというイメージ図でございます。

5ページ以降は部会報告の要約版ですので、説明は省略させていただきたいと思えます。

最後の別紙3、今後の分科会開催のスケジュール（案）でございます。先ほども部会設置についてご説明させていただきましたが、部会での議論の内容について報告を受けつつ、本日4月18日の分科会の検討内容を皮切りに、夏ごろをめどに基本的事項についての詰めの検討を行ってはどうかと。スケジュール的にどうかということがございますので、括弧書きにさせていただいております。

秋ごろをめどに、新たな計画の素案についてご審議をいただきたいと存じます。それをさらに深める形で、1月ごろにはその素案をさらにブラッシュアップして案の形に持っていき、年度末にこの分科会としての答申をつくっていただきまして、それを閣議決定に持っていくというような分科会の進め方ではどうかということでスケジュール案をまとめさせていただきます。

以上、別紙2と別紙3の説明をさせていただきました。

【丹保分科会長】ありがとうございました。今、参事官から説明いたしました第6期の点検を、南山部会長のもとで基本政策部会がお手元にあるようなものにまとめてくださいました。10回以上の会議があったのですが、それをもとにいたしまして新しい議論を起こして、夏ごろまでに一応中間的な議論を進め、できれば年度内に成案をまとめたいというのが目標でございます。

どうぞどなたからでもご発言をいただいて、内容をもう少し明確にできたらと思えますが、よろしゅうございませうか。どなたからでも結構でございます。

いろいろな議論をしていただきましたが、あまり細かいことを書いてもしょうがありませんので、最終的には北海道をどうするのだという話と、産業は思いつきで行く部分も非常に大事ですけれども、やはりある種の厚みを持ったものでないと長持ちいたしません。10年、20年先の我々の子供たちの代になっても、北海道がちゃんと動くような厚みのある産業をどうやって構築したらいいのだろうかということに主眼を置いて議論ができたらと思っております。

それから、今、東アジアが大変活発に動いておりまして、南北アメリカ、ヨーロッパ、アフリカがそろそろ手を出しているのですが、多分、日本は東南アジアと組むしかないだろうと思えますので、南アジア、東南アジアとどう組むかということも視野に入れて議論ができたらと。一番北の端にありますけれども、それなりの特徴を相互に持っておりますので、そんな議論ができたらいということも第6期のいろいろなご議論の中から出てきたサマリーであったと思えますので、どうぞよろしくご検討ください。

【中川委員】北海道開発法が改正されて北海道開発庁が今の北海道局になりまして、大変

身近な簡単な北海道開発法になりました。法律はこういうふうに変ったかもしれませんがけれども、北海道そのものは何も変わっておりません。

北海道の場合は要するに地方団体としての北海道、昔は北海道開発庁というものが現実に存在していたわけです。道民にとりまして、この両方の調和のとれた一体的な開発計画に基づいて行政、その他が執行していかないと、また裂き状態みたいな形になっても困るわけであります。

昔の北海道開発法に基づいては、北海道知事の意見が必ず法律の中で規定されておりました。ですから、北海道開発計画を策定する前段で、北海道庁を挙げて北海道の知事の意見という形と同時に、一方では北海道の全体的な計画そのものであったわけです。それが知事の意見として当時の北海道開発審議会に提案されて、そこでいろいろと議論されて、国の各省庁の意見などもそこに反映させてやったという形をとってきているわけです。

これをある程度またやっつけていかないと、北海道は北海道でやる、北海道局は北海道局でやるというふうになると、北海道の場合は単なる都道府県ではなくて、今は道州制論議が盛んになっていますが、その中でも北海道だけは間違いなく道州制になってもそのまま移行されると言われているわけです。

ここで大事なのは、北海道と北海道局、国土審議会の北海道開発分科会でまとめることとどうやって整合性を図っていくかということだと思ふのです。これまではそれが一体化されていたのですが、最近は必ずしもそうでなくなっています。特に北海道局のあり方について、北海道との関係でいろいろと外野席から言われたりして、我々もじくじたる思いを持つことがあります。その点の整合性をどうとっていくのかと。

きょう知事は来ておりませんが、副知事も来ていますから、端的な考え方を示していただきたいと思ひます。

【丹保分科会長】ありがとうございます。嵐田副知事、何か発言していただけますか。

【高橋委員代理（嵐田副知事）】北海道開発法の意見の扱いについては品川局長からお答えがあると思ひますので、私の方からは、先ほど諮問をいただきまして、これから具体的な検討をして3月までに取りまとめる北海道総合開発計画に関してご説明いたします。

北海道総合開発計画については、これまで6次にわたる計画が策定されまして、重点的な社会資本整備が図られてきたところでございます。北海道が引き続き我が国における食料基地、あるいは豊かな自然環境の保全という役割を担い、広域分散型の地域において遅れている社会資本の整備を着実に推進するためには、これまでのような基本的な枠組み、つまり北海道開発の枠組みが引き続き維持されることが必要だと考えてございます。

このため、先ほどの説明にもございましたけれども、閣議決定された計画としていただきたいというのがまず1点でございます。

二つ目は、現在、北海道も新しい総合計画を策定中でございます。6月の議会で道としての新しい総合計画の原案をお示しできるようにしたいと考えてございます。その後、9

月ぐらいをめどに計画の諮問案、そして2月の議会で計画決定に持っていきたいと考えてございます。

国の総合開発計画は年度末の閣議決定ということでございますので、道としては、今後とも本道における重要課題の方向性や地域の振興方策などについてどう調和をとっていくか、北海道局を初め関係機関と密接な連携を図りながら取り組んでいきたいと考えているところでございます。

ストレートな答えにはなっていませんが、閣議決定をきちんとしていただきたいということと、スケジュール的には大体合いますので、何とか連携を密にして、特に地域のくくり方とかいろいろな問題について必要なことは北海道局に対してお願いしていきたいと考えているところでございます。

【丹保分科会長】正しい名前は「北海道の総合開発委員会」と言いましたね。それはこれからまだ何回か近々に開かれますか。

【高橋委員代理（嵐田副知事）】これから正式に諮問する形になります。

【丹保分科会長】そうですか。この中に何人か一緒に委員もおりますし、昔、私も委員長だったせいもありまして関連しておりますので、中川先生がおっしゃったこととそごがないように、もちろん事務方はきちんとやると思いますが、ぜひ我々も議論をさせていただくようにしたいと思います。よろしく願いいたします。

品川さん、何かありますか。

【品川北海道局長】大変貴重な意見をありがとうございます。私どもも検討していく中で、嵐田副知事からもお話がありました具体的などころについては、事務的にも密接に連携をとって進めていく必要があるだろうと。特に地方段階でいろいろやっていく必要があり、そういうものからきちんと組み立てていく必要があろうかと思っております。

それから、先ほどから出ている食料基地の実現、あるいは北の国際交流拠点の形成という問題については、国として主体的、積極的な役割を担う政策課題だろうと思っております。そういった観点からこれからこの審議会でも十分議論がされていくだろうと思っておりますし、そういう中から政策課題をきちんとまとめていただけるのではないかと考えております。

また、実際には国と地域の連携がうまくいって、連携のもとに地域の自主性がまず出てくるような取り組みがビジョンとして示されていく必要があるのではないかと考えております。これはこれからいろいろご議論いただければと思っております。

それから、法律のことで恐縮でございますが、ご承知のとおり北海道開発法には関係地方公共団体から開発計画に関して内閣に対して意見を申し出ることができることになってございます。いろいろな部分で法律的根拠を持って申し出いただくことができるということです。実態上は先ほど申し上げましたように事務局もしっかり連携をとった形で、そごのないものにまとめていきたいと考えているところでございます。

【中川委員】分科会長は北海道総合開発委員会の委員長を長年やられて経験者ですからいいと思うのですが、前は北海道知事の意見という形で、法律の上でも地方公共団体という漠然とした形ではなくて、北海道という地域を代表した知事の意見というしっかりとした形ということで、そのために北海道独自に開発委員会をつくって、そこでいろいろ議論してやってきたわけです。伝統的な根拠としてそれに類似してやっていただければ、何とんでも分科会長は経験豊富な方ですからそれで結構だと思います。

もう一つはここで3点、一つは北海道開発の理念、次が産業の厚み、その次に北海道と東アジア連携に関する検討となっています。地域の問題を国際化の中で扱ったのは、私の知る限りでは北海道が最初であります。要するに、北方圏交流ということを大きな柱の一つに掲げて、当時の北海道計画もそうだったし、知事の計画もそうだったし、北海道開発計画の中にもそれがしっかり乗っかっていたわけです。

それがいつの間にか薄れていってしまっていて、いま東アジアとの連携という形が出てきました。東アジア経済連携協定みたいなものを結ぼうという日本全体の動きの中でそうなってきたのはわかります。それはそれで結構なことですが、北海道の特性とか、東アジアを見ると日本全体の問題であって、それに北海道だけが際立って何かするというのは逆に一番離れた地域になりますからとってつけたような感じで、国際化の中で北海道がどうするかということだと思います。

その点について、第3期北海道開発計画の中だったと思いますが、北方圏構想が一つ大きく取り上げられて今日まで来ています。北海道ではそれがまだ一つの国際交流の目標といますか、よりどころになっているわけです。例えば、サハリンにも北海道事務所が設けられたりしております。東アジアのシンガポールにも北海道事務所を設けておりますから、東アジアにも北の地域にも国際的なよりどころを持っています。できれば国際化の中で何も東アジアにだけに寄るのではなくて、北海道との交流の中で、距離的に、また気象的な条件、地理的な条件、いろいろなことを考えて国際化の中で北海道の役割をどう果たしていくかということの一つのポイントとしてぜひ取り上げていただきたいと思っております。

【丹保分科会長】エネルギー的にも近いところにありますし、多分、いろいろな組み合わせが先生がおっしゃった形で……。ここには書いてありませんけれども、議論をさせていただくことにいたします。ありがとうございます。

上田市長さん、一番大きな集団が札幌市ですので、もし何かバックアップいただくご意見があれば。

【上田委員】ありがとうございます。なかなかこの会議に出ることができませんで、雪まつりがありました、議会がありました、前回と前々回は欠席させていただいておりましたが、初めて参加をさせていただきます。

非常にグローバルな議論がこれから北海道をどうするかという観点で、多くの皆さん方

の知恵をここに結集すると。しかも実行部隊でございます国にしっかりバックアップしていただきながら議論ができるという、非常に幸せな場所だと考えております。

今ほど中川先生からもお話がございましたように、北海道が国際化していくということからいえば、札幌市の持っている意味は非常に大きいと思います。北海道といいますとやはり食料基地、第一次産業の基地という観点をまず忘れてはならないし、それをしっかり進めなければいけないわけですが、国際化ということになりますと必ずしも第一次産業をベースにということではなくて、札幌の持っている文化度といいますか、そういったものを発信していくことが大事だと。

それから、札幌が比較的得意にしているといいますか、早くから取り組んでおりますIT技術が北海道大学を中心に、たくさんの人材も、経験も、知識も、技術も集積をしているという意味合いで、札幌の持つ技術力を発信していく、新しい産業をポイントにいたしまして、東アジアを中心に札幌の持つ技術力を発信していくということで「eシルクロード」をやらせております。中国あるいは韓国とつないでいくことを非常に大きな魅力として、札幌が発信していくことができると思います。

それから、音楽なども、PMF（パシフィック・ミュージック・フェスティバル）は既に今年で18年目になりますが、1年に1度、7月に世界から若手の音楽家が札幌に集まるということが行われております。20世紀の代表的な指揮者でありますレナード・バーンスタインが提唱して1990年から始まったものでありますが、既に2,000人ほどの卒業生が出ておまして、世界各地のオーケストラの主要なパートの首席奏者になっているということもございます。

札幌が世界につながっていく、人的なネットワークをつくっていくという意味合いで非常に大きな貢献をしているわけでありまして。国からもいろいろなお力をかりながらバックアップしていくシステムを確立していくことも、これからの北海道を考えますと、極めて大きな価値が出てくるだろうと今は思っております。

卑近な例で申し上げますと、札幌で例えばファッションなどについても新しい動きをつくろうということでやっているものがございます。世界ではパリコレクション、東京コレクションが一番有名なところではありますが、札幌コレクションがあってもいいじゃないかということで若いデザイナー等が集まりまして、4月28日に始めたわけでありまして。これは札幌だけのことにしないで、東アジアと連携していこうという試みをトライしているところでもあります。

というのは、中国では大連はファッションの町であります。韓国では大邱（テグ）がファッションの町であります。三つの新しい町の産業としてファッションをつないで売り出していくということで、札幌の地位、北海道の評価を上げていくことも試みとしてやっているところでもあります。一発で逆転するのはなかなか難しいのですけれども、土地の北にあるというリスクをあまり感じなくて済む産業を新しくつくっていくことが大事だと思っ

ているところでございます。

ほかにもいろいろ試みているものがありますけれども、新しい試みができる町ということが札幌にとっては珍しく、かつ価値のあるものになっていくのではなからうかと思っ
ているところでありますので、ぜひこういう文化的な側面も……。

お菓子もそうです。第一次産業で牛乳がおいしい、材料がたくさんあるということになりますと、スイーツ王国をつくろうと。北海道はお菓子だということになりますと、第一次産業の付加価値を高める産業として、アレンジメントとして出てくるということも新しい試みとして札幌を中心にやっております。第一次産業をベースにしながらそれを高く売ることができる、それを生産者にバックできるというシステムをつくっていくことがこれから大事ではないかと思っ
ているところであります。場違いかもわかりませんが、そんな話をさせていただきました。

【丹保分科会長】ありがとうございました。札幌の人口は小さな県二つぐらいありますので、札幌だけではなくて北海道全体のためにどういうふうに挙動していただけるかというのは次の計画では相当大きな問題になるだろうと思っ
ますので、どうぞよろしくお願ひしたいと思っ
ます。

【上田委員】企業誘致の問題も、札幌という枠組みでとらえてはなかなか難しいのです。周辺の都市圏でしっかりやっていくときに、北海道の役割と札幌の役割はどこで線引きをするのか、どちらが主導権を持つかということもこれから整合性を持たせた議論をかなりしていかなければならないということに気づいて、過日、知事さんとそこら辺のお話し合いをさせていただきました。これから実務的にも詰めていこうというつもりでいるところ
であります。

【丹保分科会長】よろしくお願ひいたします。

見城先生、もしご意見がございましたらどうぞ。

【見城委員】僭越ですけれども、私は北海道に関して林業は詳しくないのですが、いま建築家の方々と国産材を使って新たな建築を起こしていこうじゃないかという動きのお手伝い
をしています。これから始まるのですけれども、そのようなときに北海道の林業はどうなっているのだろうか、山はどうなっているのかというのを新たな計画の中でぜひ光を当てて
いただきたいというか、当てるべきではないかということが一つです。

それから、産業の厚みということでは、北海道イコール農業ではなく、さまざまな産業はとても大事だと思っ
ます。しかし、食料危機がいろいろ言われておりますし、21世紀が水の時代と言われているが、私は水と土の時代だろうと思っ
て、水と土がある北海道は非常に貴重であります。そうしますと、200%ということ
を北海道以外のところへどう発信していくのかと。逆に、北海道の中で地産池消が本当に行われているのかというところも疑問です。そのあたりも200%で終わるのではなく、もう少し内容を具体的に
して、200%が地産池消で100%は行っていると。例えばいろいろな品物がありますか

らすべてが200%ではないとしても、それをどう発信しているのかということはとても重要です。

このあたりと先ほど大臣のご挨拶にもございましたし、皆さんのお話にも出てきましたが、ニセコなどに外国人を誘致した場合に、食料は食材としてきちんと生かされているのか、その辺も含めて産業の厚みの原点に北海道の農業がしっかり位置づけられることを期待していますし、ここは外せないと思っております。

東アジアとの連携に関しては、例えばアジアといえは九州は勢いがありまして、歴史は長いとか近いとか、いろいろなことを九州は発信しています。そういうものに対して、北海道はどういうスタンスなのかということをもう少し具体的にしていっていいのではないかと思っております。ありがとうございました。

【丹保分科会長】 それでは、ほかの委員の先生方、どなたからでもご発言をどうぞ。

【家田委員】 家田でございます。3点ほど簡単にコメントをさせていただこうと思っております。

まず1点目はこの計画のあり方で、先ほどの3点の視点は大いに賛成ですが、何を出力として出していくかというところで、従来のこの種の開発計画はアバウトな方向性と、社会基盤にしても非常にアバウトにこの辺にこういうものというぐらいのことしか書きません。

ただ、ここで少しご留意いただけるといいと思うのは、例えば道路を例に挙げますと、道路という社会基盤をつくるにしてもどういうふうなものをつくるべきであるかと。また、使うに当たってはどういうふうにするべきであるかということについても、北海道ならではの理念を書き込んだほうがいいように私は思っております。

と申しますのは、人口密度も違いますし、自然状況も違いますので、本州と同じような規格でつくるよりは、例えば2車線プラス1車線で交互に2と1が繰り返すような3車線によってコストはうんと下がり、しかもパフォーマンスは暫定2車線よりもはるかにいいものになるということであるとか、あるいは北海道の人口密度と自然条件からするとヨーロッパと一緒にするので、速度規制のあり方は現行のもので本当に正しいのかと。同じ社会基盤をつくっても同じような性能を発揮できないでいる日本の速度規制は正しいのかどうかにも言及できるようなものであるとよろしいのではないかと思います。これは一例ですが、そう思います。これが1点です。

2点目はどんな考え方で書いていくかということになると思うのですが、もちろん将来に向かっての方向性を与えるものですから夢がないといけないわけでありまして。過度にリアリティーがあってもいけないのですけれども、夢がなければいけません。

とはいうものの、やはり現実と実際の科学的な分析を踏まえたときに、責任を持って何を言うことができるのかというのは重要なことだと思っております。例えば先ほどもご発言があったように、日本側から見ると、昨今の外国人観光客で中国や台湾の方々が北海道にいらっしやっているのは事実であります。しかし、中国の人の側から見ると、一番人気

は決して日本ではないわけであって、近所の国でも韓国のほうがはるかにたくさん行っているわけです。

それを踏まえたときに、たくさん来てうれしいからそれをどんどん伸ばしましょうではなくて、北海道の観光で根本的におかしいところはないかどうかの自己チェックをして、改めるべきところがあれば抜本から改める、本質的にいいものにするということがいるのではないかと考えております。自己点検ですね。

一例でいうと、食べ物についても素材としては大変すばらしいものがありますが、先ほどの産業の厚みではないですけれども、それを加工する、しかも北海道の中で加工して付加価値をつけることに大幅にシフトしていく必要があろうと思います。

先日も山形県の庄内にたまたま仕事で行きましたけれども、現地の鶴岡、酒田あたりだけでとれる材料を使って、非常に人気のあるアル・ケッチアーノという安いイタリア料理店をやっている例もあります。やっぱり素材だけではないというところがあるのではないかと思います。

最後の3点目ですけれども、北方アジアと言うか東アジアと言うかは大差ないと思っています。アジア大陸のうちの東半分の領域であって、北も南もみんな入っているという意味で東アジアということでご理解いただければいいのではないかと思います。

それが大変な勢いで経済が伸びていく中で、例えばコンテナ船の航路も太平洋側だけを通っていたものが津軽海峡を通って、日本海を通って朝鮮半島、上海方面に行くという航行がふえているわけであります。そういう中で苫小牧の港湾とそれに隣接している新千歳空港はとんでもなく有利な条件を潜在的に秘めているエリアです。

そこだけやるのはどうかと思いますが、例えばこの分科会の中で新千歳空港、苫小牧港及びその周辺のアジア時代における新たなポテンシャルを探るということは非常に重要な検討課題ではないかと思いますので、ご検討いただけたらありがたく思います。以上、3点でございます。

【吉川委員】まず、先ほど丹保分科会長からお話のありましたスケジュール案につきましては了解させていただきたいと思います。そこで一つ注文というか、お願いをしておきたいと思いますのは、きょうは北海道の嵐田副知事がお見えになっておりますが、先ほど中川先生がおっしゃった北海道の計画とこの新たな計画の整合性を十分とっていただきたいと考えております。

なぜならば北海道局、北海道開発局は北海道特有の組織でありまして、この組織をいかに十分に活用していくかということがこれからの北海道の自立に向けた大事な視点であるからでございます。そういう意味におきましては、両者のこれからの計画はまさに北海道の自立へ向けた計画の第1歩でもあろうかと思いますので、十分な整合性を保っていただきたいと考えております。

そこでもう一つ申し上げたいことは、北海道全体は広い地域です。私はいつも申し上げ

るのですけれども、六つの地域、六つの圏域ごとにいろいろな意見を聴取していただきたいのです。北海道を一つにして考えるべきではなく、六つの圏域ごとに計画そのものをどうすればいいのかといういろいろな要望や意見を聴取していただきたいと思うのです。

同時に、これは私どもの権限が及ぶところではございませんけれども、北海道庁にお願いいたしますのは、しっかりと地域の意見を吸い上げていただきたい、圏域ごとの意見を吸い上げていただいて、今回の計画と整合性の保てるようなすばらしい行政の計画にぜひしていただきたいと。

具体的な意見は私もいろいろ持っていますけれども、きょうはそういう場ではないと思いますのであえて申し上げません。以上でございます。

【丹保分科会長】ほかにまだご発言いただいていない方はおられるでしょうか。農業の話が出ましたので、生源寺先生にご発言をお願いします。森地先生は前々回の部会長ですので、後で束ねていただけますか。

【生源寺委員】特に農業に限定した話にならないかもしれませんが、前回の分科会でも申し上げ、また基本政策部会でも、農業のみならず関連産業の厚みを意識するということは私も申し上げてきました。ですから、この点については繰り返しません。

同時に、厚みという話が出ましたので今度は広がりということだと思いますと、これは農業だけではないと思いますけれども、コミュニティーの活性化といいますか、北海道は再生という必要はないと思いますが、農村では一種の共同行動が新しい意味で非常に大事になっていると思います。

北海道の農村の場合にはそれぞれの経営は自立しているわけですので、村社会の中に埋没しているという形ではないのですけれども、例えばこのごろ道東などの農村地帯を走っていると、非常にきれいな形で花を植えている酪農家が随分おられます。あれが連続していると非常に気持ちのいい場になっています。あの中に、仮に共同行動から外れた形で非常にみつともないものが植えられると台なしになってしまうわけです。一種の公共財であり、あるいは連続することによって非常に価値が出るものがある、それはやはり共同の行動で非常に大事だということでもあります。これは外からああしろ、こうしろという話ではないわけですが、これだけすばらしいものができるというモデルがいろいろな形で、農村のみならず北海道にはあると思っております。

それから、分科会長が先ほど産業の厚み、次の世代につながるというお話をされました。これも計画をつくっていく上で非常に重要な視点で、もっと一般化いたしますと、近頃とはにかく早く収穫する、早い者勝ちという風潮も一方であるのですけれども、こういう計画をつくっていく場合には我慢強い投資なりプランも必要だろうと思います。

「ペイシャントマネー」という言葉があるかと思いますが、アーリーハーベストを必ずしも求めないのだと。ただ、これは経路がどういう形で形成されるかということ添えて明確に説明しないと短期の利益に流れがちですので、そこは注意する必要があります。

すけれども、やはり我慢強い資金、我慢強い投資、我慢強い資源の利用ということもぜひお考えいただければと思っています。

【丹保分科会長】 それでは、丸谷さん、ご発言がありましたらどうぞ。

【丸谷委員】 ご説明をいただきまして、皆様の貴重なご意見をお伺いしましてありがとうございます。お時間を先にちょうだいして恐縮でございますけれども、いまお話に出ておりました中で東アジアに向けた北海道の位置づけという議論がございました。

北方圏はもちろんですが、経済的なマーケットということを考えていくと、やはり東アジア共同体構想の中での果たし得る北海道の役割は非常に大きく、そのための人的な交流、物流的な交流のために何が重要かという視点での北海道開発が非常に重要になってくるのではないかと思います、この構想に大いに賛同したところでございます。

また同時に、これは全く私的な意見ですけれども、北海道開発の中で今まで若干欠けていたと思うのがウィンウィンの視点というか、北海道も開発、発展をして、東アジアも発展をしていくという関係、あるいは先ほど札幌市長からお話がありましたけれども、札幌が北海道の経済的な牽引力であることは間違いないですけれども、札幌と北海道のウィンウィンの関係のためにどういった環境整備などが必要になってくるのか、お互いにあるものをどう補うべきなのかということが今後の課題になってくるという気がしておりますので、そのところはまた私自身も考えてまいりたいと思います。以上でございます。

【丹保分科会長】 よろしく願いいたします。

それでは、北方圏の先兵の井須さんに、北方圏のマスターみたいなものですから、どうぞよろしく願いいたします。

【井須委員】 ご指名をいただきましたので、2点ほどお話を申し上げたいと思います。

一つは、お隣に上田札幌市長さんがいらっしゃいますが、全国的に都市部への一極集中が大変な問題になっております。特に北海道の場合は、札幌一極集中は極端なのです。いろいろな意味で、札幌市長さんにしても一極集中で優秀、有能な人ばかりが一極に集まってくればこんないいことはないのですが、実はこの格差社会で貧乏な人も札幌に行くのです。ですから、なかなか大変だと思います。

なぜ札幌へ一極集中するのかというのはいろいろなことが言われておりますが、最近深刻に思いますのは、私は稚内で生まれて育ったのでリタイアしても稚内のためになりたいし、住んでいたいのですが、いられないのです。札幌に行かなければならないのです。私の病気の主治医の先生が札幌にいます。高齢化社会ですから、いま私は74歳ですが、大体65を過ぎるとみんな一病ぐらいは持っています。丹保先生みたいに元気のいい人は別だと思っておりますけれどもね。(笑)

冗談はさておきまして、そういうことになりますと、北海道でもどこでもそうですが、医療の問題は大問題になっています。地方にはお医者さんがいないのです。ですから、札幌に出ていってお医者さんにかかるのです。こういうことが一極集中の大きな原因になっ

てきつつあるし、これからますます高齢化社会になりますと、国土の均衡ある発展から見れば好ましいことではありません。

札幌は医療ばかりではなくて、教育でも何でも、都市集積度は日本でも冠たるもので高いから集まるのはわかります。けれども、医療という問題でも一極集中が行われるという観点からも何か考えなければいけないのではないかと痛切に思います。

このまま行ったら、上田市長さん、年寄りがいっぱい集まりますよ。おどすわけではないですけども、大変なことになると思います。この分科会でもそういうことはあまり議論されたことはありませんが、札幌の一極集中は特別ですから、もう一回検討されてはどうかということが言えるかと。

もう一つは、産業の厚みというお話がありましたし、家田先生からいいお話を伺ったのであえて私が申し上げることもないのですが、観光産業について申し上げますと、やはり北海道の観光のイメージチェンジをする必要があるのではないかと痛切に思っています。

といいますのは、北だ、北だとかですね、稚内は北緯45度でありますから最北端であり、北だなど思うのです。最果てとか何とか言われて文学的にはいいのかもしれませんが、イメージ的によくありません。

北海道、しかも稚内市と同じ緯度はヨーロッパではどこかというベネチアです。ゴンドラのベニスも北緯45度です。フランスのマルセイユあたりが同じでしょうか。そういうふうには、実は本当に南なのです。ただ、気候条件は相当違います。そういうことなのでもう一步考えて、北海道は暖かいというイメージを言う必要も……。地球が温暖化しているからこそ、今から言う必要もとまずいのではないかという気がします。そういうことでイメージチェンジを図っていくことも必要ではないかと思うのです。

しかし、今までの北海道開発庁さんのお考えといえば、変な話ではありますが、国のおかげでインフラも非常に整備されています。特に、北海道の空港の整備は非常にありがたいと思っています。稚内空港ができたおかげで、今年は台湾から12便ぐらいチャーター便が来ることになりまして非常にありがたい話です。空港がなかったら来ませんからね。汽車を乗り継いではとても来ないので、本当にありがたい話で、効果があると思う次第であります。そんなこともございまして、観光あるいは地理的な問題のイメージチェンジを図っていったらどうかという感じしております。

まず地元からやらなければならないので、稚内はベニスと同じ緯度ですから、日本のベニスということになります。今のはやりだからベニスと姉妹都市提携をやったらおもしろいと思ったり、いろいろしているのですが、そんなことを考えております。

とりあえずのところは、以上の2点につきまして私の意見といたします。

【丹保分科会長】ありがとうございます。温暖化して非常に得をするのは北海道のように思えますので、書き込むかどうかは別として、頭のどこかに置くことにいたしましょう。

後はどういたしましょうか。南山さんが前回の部会長でこの後をお願いして、また続け

てということになると思うのですが、最後は南山部会長にお願いすることにして、まず森地先生。

【森地委員】前回の計画を思い出しますと、一番冒頭に「誇り高いフロンティアはどこに行ったのか」という、もう少し品のいい言葉であったと思いますが、そういう文章を書きました。その意図は、北海道の問題を北海道に限定しないで、全国的なお手本になるようなことをやってほしいというメッセージだったと思います。

そういう意味では、今の一極集中の問題とか、札幌どうこうではなくて、集中にふさわしく札幌の機能をもっと発揮させるとか、都市間距離が長いとか、人口密度が低いとか、雪国とか、道州制論とか、どうも北海道内の議論に集中して、それがほかの同じような条件のところのお手本になることを意識されながら本当に議論されているのかというところが一つの観点だという気がします。それが1点でございます。

2番目は国際戦略で、東アジアは北方からニュージーランドまでを含むコンセプトのイメージで議論をしているのだらうと思います。そういう意味では、近場は近場なりに、遠くは遠くなり国際戦略があるわけで、アジアという一つではなくて、どこと何をどういう格好でということ意識しながら議論していくことが重要かと思います。

それを世界と言った途端に宙に浮いてしましまして抽象化されてしまうのですが、アジアと言っている限りは地図が思い浮かんで、あそこに対して自分たちはどういう強みがあるかという議論だらうと思います。

3番目は、先ほどお話がございましたように、六つの圏域とか都市の個性とか、地域の厚みと言ってもいいのかもわかりませんが、非常にイメージのいい北海道に対して実はそこが多様で、いろいろな魅力を持っていますということをどうやって出せるかということが前回の計画では欠けていたことなのかもわかりません。

欠けていた理由は簡単で、これは4番目の問題ですが、今回この北海道開発計画は国土形成計画と法律上は相並ぶものですが、同時に国土形成計画の中の広域地方計画と地域的には並ぶものになります。広域地方計画がかなり具体的に時間軸上でいろいろな問題を解いていきましょうというときに、前回はどちらかという全総と同じ並びの話でよかったです。

今回はこのスタンスをどうするのかで、実は片や広域地方計画がかなり具体的で、こちらが非常に抽象的だとすると、具体の施策として北海道民にとってそれがよくないとすれば、そんなことも考えておく必要があると思っております。

【丹保分科会長】今、森地先生が最後のところで、先生が代理におなりになって会長はまだ決まっていなようですけれども、やっぱりそれとちょうど並んだものじゃないとうまく結合しないのですね。それはぜひご指導いただいて、我々も気をつけますけれども、その部分のお互いの勘合に欠けたところがないように議論はしたいと思いますので、よろしくお願いたします。

【中川委員】北海道の開発である程度成功したと言われているのは農業だと思っています。特に印象的に感じているのは、第3期北海道総合開発計画のときに大規模プロジェクトがありました。3本つくったのですが、一つは苫東、一つは石狩湾、一つは根釧の新酪農村という形で、その中で成功したのは根釧の大規模プロジェクトの新酪農村だけと言ってもいいと思うのです。

最初、あれは道庁の意見の中には入っていなかったのです。二つの工業開発プロジェクトだけが入っていて、国の意見との調整の中で、どちらかという国の方から、食料の大切さから新酪農村計画をつくって成功しました。それが象徴的に言うように、北海道開発計画の中で全国と相対的に見て地位が物すごく向上したのは農業だけであり、あとは低下していると思うのです。

生源寺先生もいらっしゃるから意見を聞きたいと思っているのですけれども、北海道農業を含めて日本の農業が大変な危機状況になっていると思います。一つは、農業が農産物をつくるのではなくて、工業原材料をつくるような雰囲気になってきたことでもあります。エタノールカーとかバイオディーゼルカーという形でやっていますが、これは特に北海道には直撃しております。

と申しますのは、ご承知のように北海道は酪農、畜産が非常にウエートの高いところですが、トウモロコシの価格が2倍以上にはね上がって、まだまだ高どまりすると。これでは酪農や畜産はとも成り立ちません。その最大の原因は、ご承知のようにアメリカにおいてトウモロコシがエタノールに、農産物が食料ではなくて工業用エネルギーの原料になるというのは農業と言っていいのかどうかよくわかりませんが、サトウキビにおいてもすごい勢いです。ヨーロッパにおいても同じであります。これが日本の食料危機という形で当然出てくるのではなかろうかと。

食料の受給率が40%という中で、隣の中国の人口が爆発して生活補助がある中で、アメリカなどのこれまで食料を供給していたところで大変な政策転換がなされてくることによって食料危機が……。

その前に相対的に北海道農業の地位が向上したのが、北海道農業の特性がものすごく失われてしまうという感じがあります。その中で北海道農業をどうするかということで、このごろはサトウキビも言われています。サトウキビも原料不足で、一時砂糖の値段が上がってこれは大変いいことだと思ったけれども、そんなことは全然話にならないような状況であります。北海道の場合、比較的優位だった農業が大変な危機になることを前提にして、農業施策をどうするかを今回よく考えていただきたいと思うのです。

北海道の中にもばかげたことを言う人がいて、食料自給も用意していないのに、食料からエタノールをつくると騒いでいる連中がおります。それも農業団体を中心にしてそういう動きをするので驚いているわけです。この点もしっかりしていかなければいけません。

ただ、そういった点で、きょうのメンバーを見て農業団体からだれが来ているのかなと

思ったら、農業団体の代表はここに入っていない。これもちょっとおかしいのではないかと。北海道の一番大事な産業の一つである農業から、1人も責任者がここに参加していないのは、なぜそうってしまったのかよくわかりません。

ただ、生源寺先生が来ていらっしゃるので、その分だけは心強く思っています。しかし、北海道農業の具体的なことになる農家の代表でないとなんとなくちょっとわかりづらと思いますので、これから追加でもいいですから、できれば北海道の農業の代表者をこのメンバーの1人に入れさせていただきたいと思っています。

【丹保分科会長】ありがとうございます。一通りお話をいただきましたので、南山さん、まとめていただけますか。それとも、次の皮切りをしていただけますか。

【南山委員】きょうはどんなお話になるのか全く検討が付きませんでしたので、まとめろと言われると途方に暮れますが、今まで感じたことを少しお話しさせていただきたいと思っています。

その前に、この前、基本政策部会のつたない部会長を務めさせていただいて、そのとき強く感じたことをいま森地先生がおっしゃったので私は意を非常に強くしたのですが、北海道開発計画というのはまさに国土形成計画と広域地方計画が合体したものであると思います。

皆さんいろいろなことを言われるのですが、そのどちらかに着目して言っているのですが、整理するときにどちらのほうに整理するのか、あるいはそういうことをはっきり明示した上で議論をしたほうがいいのか、非常に悩んだことがあります。そういう意味で、先生が言われたことはまさにおっしゃるとおりで、今後の計画のときには一層具体的になるわけですから、その辺をきちんとしていかなければいけないということがあります。

あと最近少し感じたことで今回のことに関係することを簡単に申し上げますと、一つは食料供給の大事さというのは非常に明確になったと思っています。それはいま中川先生がおっしゃったように、オイルかフードかというときですら、オイルは経済原則で割り切れるわけですからここまで行ったら買わないということが出来ます。そういうものであったとしても、そういう事情の中でトウモロコシの価格が2倍、3倍と上がることがあります。これを絶対に買わなければいけないものであったら、どこまで上がるのかということを考えておかなければいけないとつくづく思いました。はっきり言って、これは国家としての存在の基盤でありますし、その重要性は日本全国で認識しなければいけない問題であり、その中に北海道の役割があると思っています。

産業構造については私ども経済団体も昔からいろいろ言っているわけですが、どちらにしましても今より製造という分野のシェアも、皆さんがおっしゃる厚みも、要するに量、レベル、製造業との間の連携を強めていくことを考えなければ、どこか一つのところがいいことをやってもなかなか全体の力にはなりません。こういうことについても実際はこういう状況であると思っています。

東アジアとの関係では、特に今後のことを考えると、多分、しばらくの間はアメリカと中国がやはり世界の経済を引っ張っていくことになるだろうと。そういうことを考えながら、メルカトールの地図を見ているとわからないのですが、地球儀を見ると、我々のいるところは日本の中ではアメリカと中国に抜群に近いのです。船もそうですし、飛行機もそうです。これを生かさない手はないと思いますし、北海道の有力な生きる道の一つだと。ここを使っていろいろなことを計画していく、あるいは呼び込んでいくことが大事だと思います。地図をよく見ると、国家戦略としても非常に大事だというふうに感じます。

それからもう一つ、道内のことを言いますと、皆さんからもお話がありましたように、北海道は一地方とは言いながらも、四国と中国と九州をあわせたものにほとんど近い面積があります。これを一つで仕切ること自体、本来無理があるので、地方圏の特性に応じた発展の意識は当然あるはずだと思っています。

したがって、今後の具体的な計画の場合は特にそうですけれども、地方自治体、道庁もそうですし、今まで言われています各地域との連携を図って、連携ということは意見をよく聞く、自治性をつぶさに強めていくことだと思いますけれども、そして発展の道をつくり出していく必要があるのではないかと考えています。

もう一つは、井須さんからもお話がありましたように人口が減っていくといいますが、高齢化が進んでいきます。全国に先駆けて、北海道は過疎化が進んでいきます。小規模ではほかにもうちょっとあるかもしれないけれども、大規模に進むのは北海道です。そして、地域的な要素から来る深刻度はほかと比べものにならないと感じております。井須さんが言われたように、札幌に行くしかないという事態が生じます。これをにらんだ施策といえますか、地域社会の崩壊を防ぐための集落の維持、あるいは集落形成のあり方もそれぞれ自治体等とも連携しながら、やはりその対策となるものを打ち出していかねばいけないと考えております。そして、これは究極には全国のモデルにもなると思います。

そういうことを考えますと、これは国の計画ですから、その中で大事なものは国と地方の役割を既存の一つひとつの施策でちゃんと明確にしていくことです。ここまでは地方でここまでは地方ではないということを超えて、さらにどちらがやるのが住民にとっていいのか、国にとっていいのかというところまで本当はきちんとやらなければいけないのではないかと。

特に北海道の計画等との関係ではその辺をお互いにはっきり認識してやらないと、先ほど中川先生が言われたように、地元の人が非常に大変になる、また裂きみたいな状態になることがあり得ますので、その辺を我々は心がけていかねばいけないと思っています。

さらに言えば、これを実行するに当たって、10年間の計画ですから、今も行われていますけれども、着実なチェック&レビューの仕組みをちゃんと盛り込んでいかねばいけません。そして、毎年計画を修正していくこともいとわないと。これは自治体とか道庁との連携を保つと同時に、やはり現場のニーズをよく踏まえてやることが大事だと思っています。

います。以上、どういうお話になったか自分でもよくわかりませんが、感想を申し上げました。

【丹保分科会長】ありがとうございました。ひとあたりご意見をいただきましたので、次のスケジュールに移ってよろしゅうございましょうか。

今いろいろお話がございましたように、これから我々はたくさんの問題を処理していかなければいけませんので、かなり頻繁に議論を進めなければなりません。前回のときもさせていただいたのですが、国土審議会令の第3条第1項という規定がございまして部会を設けることができることになっておりますので、部会をつくらせていただきまして、部会を中心にして素案を議論していただいて、それを原案にまた分科会に上げるという形を繰り返してまとまりにしたいと思います。部会をつくることをご承認いただいてよろしゅうございましょうか。

（「賛成」と呼ぶ者あり）

【丹保分科会長】ありがとうございます。それでは、前と同じように部会をつくらせていただくことにいたします。部会のメンバーを決めていただかなければならないのですが、きょう急にというわけにもまいりませんので、いろいろ地域の合意形成プロセス等も含めて、きょうは学識経験者で家田先生と生源寺先生がいらっしゃって地域計画に詳しいのでお入りいただいておりますし、これからもお願いしたいと思います。

そのほか道内に関しましては、中川委員からも農業関係を強化するというご発言もありましたので、その辺も検討させていただくことにしたいと思います。

かなり集中的に議論をしなければいけませんし、足場の問題もございしますので、これからそれぞれの先生方とご相談をしながら、今のお2人の先生プラス5名とか6名とか7名という形で、10名前後のメンバーで部会を動かすことにさせていただきたいと思いますが、よろしゅうございましょうか。人選に関しましては事務局と相談して、お名前が挙がってご了解が得られたら私の責任でご相談をして、ご報告をしながら決定したいと思います。よろしゅうございましょうか。

（「異議なし」と呼ぶ者あり）

【丹保分科会長】ありがとうございます。それでは、詳細の人選等につきましては私にご一任いただけたということで進めます。ありがとうございました。

それでは、これできょうの予定は一通り終わりですけれども、何かご発言はございましょうか。もしよろしければ閉会したいと思います。総務課長から何かありましたら。

【山下総務課長】きょうお配りいたしました資料につきましては、その場に置いていただければ後ほど送らせていただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。以上でございます。

【丹保分科会長】本当にお忙しいところをありがとうございました。これからもよろしく願いいたします。